番　　　号	15請願第16号　（総務付託）
受理年月日	平成１５年　９月１０日
件　　　名	戦闘状態の続くイラクへの自衛隊派遣の中止を求める意見書に関することについて
提　出　者	ネットワーク「地球村」ひばりが丘 代表　田辺　妃登美 伊藤　啓子 児玉　千津子 浦　美樹子 村岡　純子
紹 介 議 員	谷口　敏也、杉本　英騎

要　　　　　　　　　旨

〔要旨〕

戦闘状態と劣化ウラン弾による放射能汚染の続くイラクへの自衛隊派遣の中止を強く三鷹市として要望するため、日本政府に対する意見書を採択してください。

〔請願理由〕

日本政府は「イラク復興支援特別措置法」に基づき、自衛隊をイラクに派遣し、人道支援活動だけでなく、“ 安全確保活動 ” という、事実上の米軍の支援活動を行おうとしています。

イラクではイラク占領米軍司令官のいう「我々はまだ戦争状態にあり」「イラクを戦闘地域と非戦闘地域に分けることはできない」という事態が続いています。イラク人は、みずからの手で民主的な選挙を実施し、国民の代表と憲法を決めたいと考えていますが、いまだ国民選挙の見通しは立っておらず、占領軍に対する不満の声が日増しに強くなっています。

アメリカからイラクへの派兵の要請を受けたカナダ、パキスタン、インドは「国連の主導によるイラク復興支援となっていない」ことを理由にはっきりと派兵を拒否しています。また、アメリカ国内でも米兵家族会は、ブッシュ大統領と米国会議員に対し兵士の帰国を求める運動を開始しています。

日本は米軍のいるところすべてが戦闘地域となりうるイラクへ自衛隊員を送り出そうとしていますが、このような状態の中で自衛隊員を送れば襲撃の標的になることは間違いありません。

さらに強く懸念されるのは、劣化ウラン弾による被曝です。砲弾、銃弾、りゅう弾の弾頭や戦車装甲などに広く利用されている原子力発電所から発生する核のゴミ、劣化ウランの放射能の怖さです。湾岸戦争、ボスニア・コソボ、アフガン、イラクなどからの米国の帰還兵68万人のうち28万人が今も奇病、白血病、がんなどの病気に悩まされ、約１万人が死亡しています。劣化ウランの粉じんは体内に入ると免疫システムを破壊します。湾岸戦争以降の帰還兵の妻たちが流産したり、先天性の障害を持つ子どもたち（Ｇｕｌｆ Ｗａｒ Ｂａｂｙ）が生まれています。

微量放射能はＤＮＡを傷つけ、遺伝的に孫やひ孫にその影響が強く出ると言われています。恐ろしいことに放射能は目に見えません。そして、免疫力のない小さな子どもたちほど確実に放射能の影響を強く受けています。

私たちは人道的にもこのように放射能汚染されているイラクへ自衛隊員を送り出すということには賛成できません。

今一番必要としているのは、イラクで劣化ウランの後遺症で苦しんでいる薬もなく医療も受けられずに毎日死んでいく子どもたちや同様の後遺症で苦しんでいるアフガンの人々、そしてアメリカの兵士の人たちに対する支援をしていくことではないでしょうか。それこそがこの地球にともに生きている私たちが人間として早急にすべきことではないでしょうか。戦争や紛争を長引かせるということはさらに全地球的な放射能汚染を拡大してしまうことになります。私たちはこのような負の遺産を未来世代に残さないように被爆国である日本が世界に発信していくべきではないでしょうか。

戦闘状態と放射能汚染の続くイラクへ自衛隊を送り込むことについて、慎重なる検討の上、見合わせるよう強く政府に求めることをお願い申し上げます。